

北海道の米軍・自衛隊の動向情報 北海道平和委員会発信

寒さに弱いオスプレイを実証した 「ノーザンヴァイパー」

日米共同訓練

北海道平和委員会代表理事 内山 博

『オスプレイ またドタキャン、機体の脆弱さ露呈 視界不良 着氷の恐れ 日米共同統合防災訓練』・・・「高知民報」の 2014 年報道

この新聞によると同 2 月 7 日、オスプレイ不参加の情報が高知駐屯地や県に入った。普天間と岩国基地の天候と視界不良、機体への着氷の恐れを理由に普天間基地を離陸しないという連絡が海兵隊側からあった。この報道は 四国の 2 月の高知での着氷のおそれ。厳寒期の 2 月の北海道でのオスプレイには機体に欠陥があるのではと調査することにした。また今回の演習で当初、十勝飛行場をオスプレイ補給基地として予定が、直前に変更され千歳基地になったのはなぜかと疑問を抱かせた。

オスプレイ MV-22 「乗務員飛行マニュアル」(英文)を手に入れた、寒さに弱い実態が記載されていた。

マニュアルを見てオスプレイが「 -4°C ～ -15°C で着氷を起こす危険」と機体の故障の可能性を指摘し、そのような事態には緊急に陸や水上に着陸するよう指示している。そのための応急対処を乗務員飛行マニュアルである。



北海道大演習場に降下するオスプレイ

寒い北海道でオスプレイは訓練ができたのでしょうか？

沖縄から8日も遅れてノーザンヴァイパーの参加のため千歳基地についてのオスプレイは遅延の理由を防衛省によると米海兵隊は「運用上の理由」と、まともな説明をしていない。陸上自衛隊には「悪天候が理由」と説明しているようだ。この期間、民間機は問題なく新千歳空港を離発着していた。

オスプレイは冬季の訓練の実績は一度もなく、冬の訓練は初めてである。そんなことを道民に知らせることもなく、寒さに弱いことすら隠して試そうとして道民に危険を及ぼしていた。

では訓練の実態は。

2月4日に千歳基地に着陸して、5日、6日、7日の3日間の訓練で、トータル時間は4時間10分であった。千歳基地から北海道演習場(着陸を含めて)での訓練は3時間35分後の1時間35分は苫小牧上空を飛行 矢臼別演習場の飛行は中止 千歳の気温は5日は5.4度 6日は18.7度である。マニュアルでは故障などの発生の可能性がある。オスプレイが短時間の訓練は、寒さによる凍結と故障の回避とみて良いでしょう、当然矢臼別には飛行できないのはわかりきったことでした。

また実証することが起きました。オスプレイが仙台空港に緊急着陸

訓練に参加していたオスプレイが2月10日に1機、千歳基地から帰還する途中、仙台空港に緊急着陸していた。仙台防衛局によると、米軍から「凍結警告灯」が点滅したので予防着陸するとの連絡があつて、6時40分に着陸。14時30分離陸(気温が上がり)。ここでも民間機は通常に飛んでいた。

警告灯は、マニュアルにあるOTA計器に表示されたのではないか。雪や寒さに弱いことを露呈した。

道平和委員会が指摘した雪や寒さに弱いという事実が実証された。反対の世論を盛り上げていくことの一因になった。また災害救援を口実に参加しても、混乱と不信をまき散らし、事故の危険もあるオスプレイの脆弱性が明らかになってきた。

27日から始まった演習の状況を概略的に述べます。

日米共同訓練・ノーザンヴァイパーの演習の状況 ～抗議・監視活動から

矢臼別平和委員会事務局長 中村忠士

27日から始まった演習の状況を概略的に述べます。

1月27日・28日…米軍ヘリ2機と自衛隊機合わせて10機ほどが演習場の弾着地付近の上空で共同飛行訓練を行う。ヘリから射撃音(ロケット弾)が聞こえる。

1月29日…射撃、飛行訓練はなし。

1月30日・31日…風雪のため、訓練は中止。(安全のため監視本部も一時閉鎖)

2月1日…155mmりゅう弾砲を中心として実弾砲撃訓練(8:30～16:30 98発)

2月2日…米軍ヘリの攻撃訓練、りゅう弾砲などの砲撃訓練、小火器(機関銃)の射撃訓練を同時に行う。(大型火砲 155 発)

2月3日…155mmりゅう弾砲を中心に激しい実弾砲撃(193発)、同時に小火器(機関銃)の射撃音が70分間途切れることなく聞こえる場面も。

2月4日…射撃、飛行訓練はなし。

2月5日・6日…155mmりゅう弾砲を中心として実弾砲撃訓練(5日 204発・6日 236発)、同時に米軍機2機(AH-1とUH-1)が飛行訓練。川瀬牧場真上を飛ぶ。

2月7日…午前中で訓練終了。155mmりゅう弾砲を中心として実弾砲撃訓練(69発)、同時に米軍機2機(AH-1とUH-1)が飛行訓練。川瀬牧場真上を低空で飛ぶ。

=平和新聞・道内版で割愛した分=

「日本版海兵隊」北海道に新設検討 水陸機動団、訓練環境整う

産経新聞 2月8日 17:30

防衛省が陸上自衛隊の離島奪還部隊「水陸機動団」について、北海道の陸自駐屯地への新設を検討していることが分かった。長崎県佐世保市の相浦駐屯地に次ぐ2カ所目の配置となる。規模は600人程度で令和5年度末までに立ち上げる方針。「日本版海兵隊」と言われる精鋭部隊を増強し、中国公船の領海侵入が続く尖閣諸島(沖縄県石垣市)など南西諸島の防衛強化を図る。

夏までに配置先を選定し、令和3年度予算案に新設経費を計上する方向で調整している。南西諸島有事での即応性を重視し、沖縄本島へ新設する案もあるが、訓練環境が整い、地元の理解も得やすい北海道が有力になっている。

水陸機動団は、相浦駐屯地(2個連隊)のほか、3個目の連隊を相浦以外に作る計画が決まっている。北海道は即応性は不十分だが、浜大樹訓練場(大樹町)など海に面した訓練場があり、訓練実績も多い。自衛隊関係者は「周辺国への抑止効果のためにも訓練を重ねて能力を高めることが不可欠」と語る。

沖縄本島については、多くの米軍基地や軍事訓練を抱える地元から政府への反発があり、部隊新設の調整が進むのか不透明だ。

■水陸機動団 水陸両用作戦を担う陸上自衛隊の部隊。日本の離島が侵攻された場合、水陸両用車やボートなどで上陸し、敵の上陸部隊を奇襲して島を奪還する。米海兵隊を手本に、平成29年度末に相浦駐屯地に発足。2個の連隊のほか、後方支援、通信、偵察など2100人態勢を組む。米国などで米海兵隊との共同訓練も実施している。